

Déjà 30 ans

林田 浩見

『広島大学フランス文学研究』創刊当時を知る数少ないメンバーの一人となってしまったのだろうか。30周年を迎えると聞いて改めて思う。30年という時間の流れは誰にとっても等しく長く、また一様ではない。私学の学部を卒業後、大学院から広島大学に来ていた私は、当時、博士前期から後期課程に進学したところであった。院に入った当初は戸惑ったものだが、新鮮でもあった。

驚いた事のいくつか。

その1. 今は既がない旧文学部木造校舎での大学院入学試験。2月。実に寒かった。試験会場の広い講義室の四隅にちょこんと設置してあった暖房器具は描写し難いようなものだった。木造の廊下は「鶯張り」と呼ばれていたとは後で知った。

その2. 4月入学、そして研究室での顔合わせ。暗い仏文研究室の大机の周りに集まったのは、教授、助教授、フランス人講師、助手それぞれ1名の先生方、学部1年生から大学院生まで総勢何名いたかは覚えていないが、皆集まれるその数の少なさと年齢層の幅の広さ。ここは国立大学だと何故か改めて思った。

その3. 院生たちはみんな仲良くよく遊ぶ。それもほぼ毎日のように…（ここは麻雀クラブか？）

その4. 受験する時点でわかってはいたが、教授のご専門は20世紀、助教授のご専門は中世、それ以外の世紀文学を専門とする者には指導を仰ぐ先生は研究室にはおられず、バルザックを研究しようとしていた私には図書館が頼りであった。インターネットのある今とは違い、研究書の検索などは先ず図書館に行って調べ、学外からコピーを取り寄せるためには手書きで申請する、他学部・他大学の先生をお訪ねし蔵書をお借りする、コピーさせて頂く等々。すべては紙頼み。しかし、薄暗い図書館や紙の匂い、インクの匂い、あの時代の匂いはやはり懐かしい。

その5. 中世。ancien françaisの辞書をひもとき、『薔薇物語』や『狐物語』を読む授業はとても新鮮だった。暗号解読のような面白さがあった、などと言ってお叱りをうけるだろうか。

そんな環境にも慣れ（麻雀はしなかったが、飲みはした、かもしれない。勉強もした、と思う。）、2年目、やがて修論の提出の迫る冬期休暇。翌年に生まれる研究

会誌創刊号に寄稿することになろうとはまだ知らぬ寒い冬。雪の降るクリスマスイヴにアパートの外で鳴いていた子猫を部屋に抱き入れ、膝にのせて書いていたのも忘れられない。が、もっと忘れられないのは締め切り迫る日々のこと。ワープロなどはあるわけもなく、万年筆で手書きの原稿に仏文レジュメはタイプライターの時代。なんとか書き上げたものの280数枚を清書する時間は締め切りまで2日もあったかなかったか。レジュメも作らねばならない。まず無理だったろう、あの恩恵がなければ...私の修士論文は6名の筆跡のコラージュとなったのだった...30年前、拙い他人の論文の悪筆原稿の清書を、深夜に及び黙々と手伝ってくださったみなさん！ありがとうございます！この中には、フランス語は勉強した事もない従妹までいたのだった。仕事帰りに駆けつけてくれたのだった...猫の手までは借りなかったが...30年経った今、懺悔と深謝。

4月。ドクターに進学した年、当時の仏文主任教授でいらした杉山先生のお声掛けで、院生たちの論文発表の場をつくろうと研究発表会、研究会誌の発行の構想ができた。夏に初めての研究発表会。試行錯誤の後、初めて雑誌の形になった。その研究会誌が、今年30周年を迎える。その間、全国各地に就職していった院生たち、研究室を去って行った人たち、転職した人たち、お若くして鬼籍に入られた先輩、一人一人の顔が浮かぶ。杉山先生、原野先生は退職され、フランス人講師はその間何人も入れ替わった。学籍のあった頃、最も思い出に残っているフランス人の先生はヴィダル先生。決して多くない院生たちとそれほど年も離れていなかったからか、授業以外でも、院生をご自宅に呼んでくださりニンニクたっぷりの南仏料理をふるまってくださったり、我が狭いアパートにみんな集まり食事をしたり、深夜までカード遊びに興じたりもした。そのヴィダル先生と20数年後広島で再会した折の宴は、思い出話も尽きず、楽しく懐かしいものであった。

当初は、毎年7月の研究発表会には、近隣で研究職に就いておられる先輩方ばかりか、一般就職をされた先輩方や、遠くにお住まいの先輩方までが足を運ばれ、懇親会は2次会、3次会とよく飲み歩いたりもした。その後キャンパスが広島市内から東広島市に移転した事情もあろうが、近年はそのようなことはなくなったものの、時々遠くから里帰りの様に来て下さる方々もあり、この地に長く居座り続けている私にとっては、年を経るにつれ懐かしさは増してゆく。

非常勤職を長く続けてきて感じる変化といえは、赴く先々の教室で接するフラン

ス語を受講する学生たちの変化、第二外国語の近頃の肩身の狭さだろうか。

どこでも言われているように第二外国語の枠組みが減らされて行く中、フランス語を選択する学生も減ってきている事には憂いを通り越して危機的なものを覚える。一部で4年制大学は専門学校化してきているようだ。そんな中で、遙かな文化に憧れを持ってフランス語を学ぼうという学生も少なくなったのか。中には英語だけでできればよいといった助言を教師やチューターから受けたという学生もいるというのだから益々おかしい。どこか間違っていないか。どこへ向かっているのだろうか。以前は、第二外国語としてフランス語を勉強するうちにフランスに留学したい、仏文科に入りたい、大学院からフランス語を専攻できないかと相談に来てくれる学生もいた時代があったのだ。

大学の一般的な第二外国語事情はさておき、ここ仏文研究室では、数少ない院生や卒業生が時間を割いて発刊までの事務的な作業を引き受け、会員が途絶える事無く研究発表、執筆を担ってきたことでこの研究会誌は支えられてきた。そうしてこの度30周年を迎える事ができたのだから、喜ばしい事だ。この先、50周年、いや更に存続して行くには、いくつかの点で変革も必要となってくるかもしれない。自然と生ずる変化もあるだろうし、自由な発想が道を繋げていくかもしれない。未永く引き継がれて行くことを願うばかりだ。

記念号という事で、雑文を寄せるもよしとされ、思い浮かぶままに書かせて頂いた。何しろ30年という時を経た今、拙文中記憶違いによる記述があったとしたらお許しを請いたい。それほど罪深いものは無いと思う故。30号が発刊される今年の年末は、久々に多くの懐かしい方々が集って多いに盛り上がることだろう、と今から想像している。(2011年秋)